

氏名	菅野将典
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第172号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉武満徹《妖精の距離》《遮らない休息》など計9曲 〈論文〉武満徹作品における記譜の諸相とその演奏解釈
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 渡辺 健二
（副査）	〃 〃（ 〃 ） 畑 瞬一郎
（ 〃 ）	〃 名誉教授 船 山 隆
（ 〃 ）	〃 准教授（ 〃 ） 東 誠三

（論文内容の要旨）

本論文は、武満徹（1930～96）のこれまでの研究において触れられることのなかった、楽譜に顕れる細かな記譜表現や様々な記譜法について、それらがどのような意図のもとに用いられたかを明らかにし、同時に、彼の作品をどのように演奏解釈すべきか、という問題を解き明かすものである。

武満徹はその生涯に数多くの作品を残しており、その楽譜には緻密な書き込みがなされている。しかし、その楽譜から彼の意図を読み解こうとすればするほど、譜面上になされた記譜には多くの謎と疑問が生じてくる。たとえば、ピアノ独奏曲《遮られない休息》に書かれた、符尾と連桁の両方が付けられた八分音符は、その記譜が意図的になされていると想像できるだけに、どのように演奏解釈すべきかという問題に突き当たってしまう。あるいは、武満徹の多くの作品には、不完全なもの、点線のもの、括弧上のものなど、多種多様な小節線が用いられているが、これらの使い分けの規則は不明瞭である。また、弦楽四重奏曲《ア・ウェイ・ア・ローン》に書かれたTempo Iには、曲中で異なる速度が指示されていることも大きな疑問のひとつである。

これらの楽譜上の疑問とともに、特定の演奏家を想定して作られたとされる武満作品を、それ以外の演奏家が演奏するという意味や、そこで為しうる演奏解釈の可能性ということも、これまであまり論じられることはなかった問題である。本論文は、筆者の演奏家としての立場から生じた、このような記譜と演奏解釈に対する疑問について、体系的に考察を進めるものである。

本論文の第1章から第3章では、記譜の問題について論じた。第1章では、武満作品の楽譜の上で、「時間」に関する記譜の諸相を整理し、「拍子記号」の有無と、「速度指定」の基準の違いから、3つの「時間記譜法」に分類した。その結果として、武満徹の作品は、それぞれが異なる特徴をもつ、3つの年代に区分できることを明らかにした。

第2章では、武満初期の1950年代と、中期の1960年代～70年代の2つの年代において、武満徹のさまざまな時間記譜法や記譜表現を発展させた過程を明らかにし、拍子記号や小節線、連桁や符尾が、重要な記譜表現として用いられていることが明らかにされた。また、さまざまな時間記譜法が、武満徹の「時間」の対峙や多層化の手段として用いられる過程や、楽譜の上に演奏者への配慮が顕れる時期を特定した。

第3章では、1980年代の作品に特徴的な、「Tempo I」「Tempo II」という表記をとりあげ、それらの表記と作品の題材との関係性を解き明かした。また、この「2つのテンポ」が、1980年代の武満徹の思想のなかの、「宇宙的」な概念を象徴するものであることを明らかにした。

第4章から第5章にかけては、演奏解釈の問題について論じている。第4章では、武満徹の理想とした演奏のあり方を、さまざまな言説をもとに時系列的に読み解いている。その結果、彼が理想とした演奏のあり方は、年代によって変化していることが明らかになった。そして、晩年には、武満徹が「歪形」と「想像力」を中心とした、独自の演奏観を描いていたことを示した。そして最後の第5章では、ここまでの研究成果をもとに、《遮られない休息》、《ピアニストのためのコロナ》、《雨の樹素描》の3つのピアノ独奏曲について、それぞれの作品の演奏解釈を例示した。

このような研究を進めることで、武満作品の楽譜にあらわれるさまざまな記譜表現が、どのような意図によるものかが明らかになっていった。これらの研究成果は、今後、武満作品の演奏に臨む多くの演奏家の助けとなるだけでなく、武満研究のなかでも、作品分析と組み合わせ生かされていくことで、これまで以上に武満徹の作品像がはっきりと示されていくことになるだろう。

記譜に関する具体的な研究成果と並んで、武満徹の理想とした音楽のあり方と、そこに占める演奏の位置づけを解明したことは、本論文の重要な成果だといえる。第4章で挙げている演奏と意味伝達のモデルは、筆者が修士論文のなかで論じていたものであるが、「音響の伝達」と「意図の伝達」の間に生じる葛藤に対して、武満徹の理想とした演奏のあり方は、ひとつの解決策を示すものであった。武満徹の独創的な「歪形」と「想像力」を中心とした音楽のあり方は、現代の日本の音楽状況の中でこそ生まれ得たものであり、聴衆論から不確定性と確定性の問題、作曲家と演奏家それぞれのアイデンティティの問題などがすべて反映された、示唆に富んだモデルが提示されることとなった。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、武満作品の記譜上の特徴を詳細に考察し、それに基づいた演奏解釈を提示しようとするものである。

申請者はまず第1章～第3章において、武満の記譜法について詳細な分析を加え、3種類の時間記譜法についての変遷を明らかにした。また、一時期の武満に多く見られる、Tempo I及びTempo IIが意味するところについても深い考察を行っている。続いて第4章においては武満の理想とする演奏について幾つかの演奏の模式図を提示しつつ考察を加え、第5章においては、それまでの研究成果を踏まえ、実際の作品の演奏解釈について論じている。

武満の全作品を精査し、自筆原稿、著述・発言、上演記録など現存する資料に加え、先行研究も可能な限り調べ上げた上で本研究は、非常に緻密なものであり、武満作品の理解を深めるものとして高く評価できる。とりわけ、「遮られない休息」を自筆譜と印刷譜の比較によって分析し、武満の意図を深く考察したことや、第5章に書かれた「ピアニストのためのコロナ」の図形楽譜のリアリゼーションを含む演奏への提言は、武満作品の演奏解釈において大きな示唆を与えるものとして極めて興味深い。

演奏は、プログラミング、舞台上の楽器配置（ピアノ3台）等も含め、研究の成果を活かした秀逸なものであった。「ピアニストのためのコロナ」を中心に置き、室内楽作品も含めて彼の作品を年代順に演奏したこと、舞台上に離れた配置された3台のピアノを順次演奏していったこと、曲間の拍手を避け証明に工夫をこらしたこと等も含め、武満の小宇宙が満喫できたと言えよう。演奏自体のクオリティも非常に高く、人間味のある暖かい音を主体として、多彩な音色、音量を使い分け、作品研究の成果を活かしきった見事なものであった。ただ、緻密に考え抜かれた「ピアニストのためのコロナ」のリアリゼーションが、演奏の見事さと裏腹に、その構成が聴衆に充分伝わったかどうかについては意見の分かれるところであろう。

文章表現や資料の提示の仕方に若干の不備はあるものの、膨大な資料に基づく考え抜かれた論文であり、演奏もまた非常に説得力があり、学位を与えるに相応しい優秀な研究として合格と判定した。